

I-B-1

早期胃癌の粘液及び分泌蛋白に関する組織化学的検討

堤 寛

(慶大病理・東海大病理)

三方淳男

(慶大病理)

名倉 宏

(東海大病理)

胃癌の産生する粘液及び分泌蛋白を組織化学的に検討し、その発生母地について考察した。材料及び方法：手術切除早期胃癌17例のホルマリン固定パラフィン切片について、PAS, AB pH2.5又は1.0, HID-AB, ConA paradox 染色(CPS), アルカリ水解で誘導されるPAS(A1-PAS)等の粘液染色と酵素抗体(PAP)法によるIgA, secretory component(SC), Lysozyme(Lz), Lactoferrin(Lf), CEAの局在を観察した。結果：印環細胞型の3例中2例はPAS優勢型で粘膜底部に層状のCPSⅢ型粘液とSC, Lzを、粘膜上層にCEAの強い局在を認めた。1例は酸性粘液型で多数の好銀細胞をみたが層状分化は認めない。分化型の14例では酸性粘液優勢型8例, PAS優勢型1例, 混在型5例だが、10例にCPSⅢ型粘液(defectiveな染色性を示す場合が多い)を、2例にA1-PAS陽性の杯細胞型粘液を認めた。SC, Lzは大部分の例に陽性部がみられたが、Lf陽性例は少数だった。CEAは全例陽性で癌化の範囲決定に有用と思われた。結語：印環細胞型、分化型いずれにも幽門腺及び上皮への分化傾向が認められ、腸上皮化生→分化型、固有腺→印環細胞型という図式には疑問が残る。

I-B-2

胎生期胃粘膜に含まれるムコ多糖

山本 昇, 勝又 修, 山下修二,

安田健次郎,

(北里大. 医)

①エポソ包埋切片を用いて細胞内の糖残基の局在をレクチンを用いて証明する方法を検討した。②細胞膜表面の糖残基の種類と分布は組織によつて異なり、また同一組織でも胎生期と成体では差があるといわれる。それでは細胞内に蓄積あるいは細胞外に分泌される物質の性質も胎生期と成体では変化するであろうか。③胃粘膜には中性ムコ多糖、酸性ムコ多糖、含硫酸ムチンの3種のムコ多糖が存在するが、それらは同一部位に共存するのか、異なる部位に存在するのか。以上の点を解明するために今回の実験を試みた。胎生11日から生後40日目に到るラットの胃体部(または将来胃体部となる部位)のエポソ包埋切片を作成し、PAS, Alcian Blue, Toluidine Blue, Diamin各染色法によつて光学顕微鏡レベルで観察し、同時にPA-TCH-SP法によつて電子顕微鏡でも観察した。またビオチンで標識した各種凝集素(ConA, SBA, WGA, DBA, UEA, RCA, PNA)を切片と反応後、アビジン-ペルオキシダーゼ(アビジン-フェリチン)と反応させることによつて各細胞内のムコ多糖を検出した。①エポソ切片でも細胞内の糖残基の証明は可能である。②胎生期から成体にかけて胃体部に含まれる糖残基は変化する。③細胞によつて含まれるムコ多糖の種類は異なる。